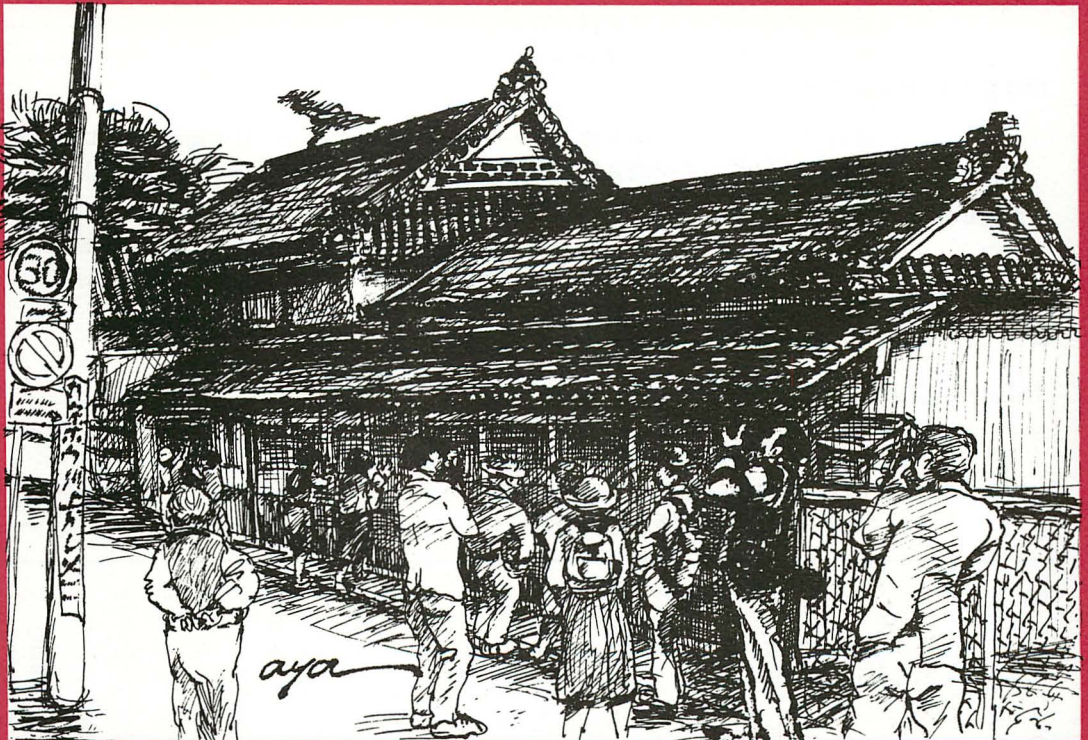


まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL 32



川内町 金比羅街道

## 特 暮らしと文化 集

『伝統文化とまちづくり』

- でこ芝居「朝日文楽」
- 五十崎の和紙
- 無数の笑顔への旅
- 芋炊きネットワーク
- 伊予水引と伊予三島

まちづくりと連携.....(株)伊予銀行会長／榎田三郎..... 3

**特** 暮らしと文化 **集**

「伝統文化とまちづくり」

でこ芝居「朝日文楽」..... 三 瓶 町／井上 修..... 4  
 五十崎の和紙..... 五十 崎 町／西岡芳則..... 6  
 無数の笑顔への旅..... 新 居 浜 市／森賀盾雄..... 8  
 芋炊きネットワーク..... 大 洲 市／菅野隆次.....10  
 伊予水引と伊予三島..... 伊予三島市／有高三男.....12

レポート

第2回シンポジウム「地球と鉄」.....14  
 まちづくり草の根文化講演会.....16

地域づくり研究会議から

地域づくりのベースを求めて.....五十崎町／宮本俊一.....18  
 地域づくり西日本交流会議益田大会..... 双 海 町／若松進一.....20

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(松山市、宇和島市から).....22  
 元気印レポート(一本松町、内子町から).....24  
 <篠南の天狗が正木を変える>  
 <文化の香る村を夢みて>

Information

媛のくにフラッシュ.....28  
 (玉川町、双海町、城川町、新宮村、上浦町、内子町)  
 TOWNタウン通信.....31  
 地域づくり研究会議からのお知らせ.....32

特集 暮らしと文化

今号のテーマ

「伝統文化とまちづくり」

私たち日本民族や社会が長い歴史を通して培い、伝えて来た信仰・風習・制度・思想・学問・芸術・産業など、すばらしい伝統あるいは伝統的なものは際限がない程数多くあります。

今回の「舞たうん」の特集は、「伝統文化とまちづくり」をテーマに、そうした伝統芸能・伝統工芸・伝統産業・伝統玩具・伝統食文化のそれぞれの分野で実践されている五名の方々にご登場願いました。

伝統と私たちの暮らしを見つめた場合、先人が創り継承してきた伝統が大変価値あるものと分かっている、それを見たり活かしたりする私たちの価値観の問題や時代の適合性の問題もあります。また、今後、伝統を保存継承していくだけでなく伝統に新しい技術や創造性などを加味していくことも必要ではないかと考えられます。

ともあれ、今回の特集を契機に今一度、伝統文化は私たちの暮らしにとって何なのか?を問い直す機会になれば幸いです。

表紙の言葉

汗ばむ程好天気恵まれて、東京から愛媛の地に入った路上観察学会のメンバーと一緒に、ふるさと再発見ウォッチングに参加。

私の一日目は、川内町方面。学会員の赤瀬川原平さんが、カメラに何を収めるのか興味のあるところ。それが、観察しようものか、あつという間に消えてしまう早足でした。

柳原あや子





本年六月に「92

四国フォーラムー愛媛

会議」が松山市で開催され、

その基調講演の中で、総合研究

開発機構（NIRA）の星野進保

理事長が「九州は福岡、東北は仙

台、北海道は札幌を中心にして「地

方」が見えてくるが、中・四国、

特に四国は何も見えない」という

お話をされた。

確かに四国には核となる中枢都

市がない。また、『古事記』に「身

一つにして面四つ有り」とあるよ

うに、島である宿命感や一体感は

根強く持つてはいるが、四県がそ

れぞれ独自の顔を持っていること

も事実である。

このようなことを考えると、高  
速道路が整備され、四国内の都市

間の時間距離が大幅に短縮されて  
も、四国においては一大都市を中  
心にして一体的に開発していくと  
いうことは難しいと思う。

むしろ四国の場合、四県都や中

小都市をリンケージさせて、結果

として四国全域が発展していくと

いう方策の方がふさわしいのでは

ないかという気がする。もともと

個性のない同質の都市同士であれ

ばどうしても規模の大きい都市に

引かれていくことになるので、リ

ンケージされる各都市が個性的で

あることが大前提になる。

同様に、愛媛県内各地のまちづ

くりについても、個性のあるまち

づくりを進めることが大切であつ

て、ミニ東京や他地域の模倣では  
意味がない。ただ、急激な都市化

と情報化の進展によって、地方の  
自然や伝統的な景観が破壊され、  
生活環境は画一化してきている。  
そのため、地域固有の文化やコ  
ミュニティといった地域の個性と  
魅力が失われつつある。今一度、  
自分たちの住んでいる地域を見つ  
め直し、個性のある町をつくるた  
めには何が本当に必要なのか、そ  
のために何をすべきなのかをしつ  
かりと認識し、その共通の認識の  
もとに、住民と行政が一体となつ  
て個性あるまちづくりに取り組む  
必要がある。

そして、まちづくりにおいても  
相互に連携することが大切ではな

いかと思う。いくら個性があつて  
も単独では魅力に限界がある。個  
性のある町が連携し機能を分担す  
れば、総合的な個性を選択できる  
ことになり、大都市に負けない魅  
力がつくり出されるはずである。

地方における若者の流出が問題  
になっているが、大学の数からす  
れば、愛媛県内の若者が県外の大  
学に進学するのはやむを得ないで  
あろうし、視野を広めるといふ観  
点からはむしろ望ましいことかも  
知れない。しかし、大学卒業後は  
帰って来たくないような魅力ある  
地域にしなければならぬと思ふ。  
あるフォーラムで、「魅力のある  
町とはどういう町か」と問かれ、  
経済企画庁の女性課長は、「お嫁  
に行きたくなるような町」と答え  
たそうである。個性のあるまちづ  
くりと相互連携によって、そのよ  
うな本場に魅力のある地域になる  
ことを願っている。





## でござ居「朝日文楽」あさひ

三瓶文化会館館長 井上 修

さらに、男人形、女人形、子役人形を作ったことで、地区の青年が自然に集まり、人形を操るようになってからは、酒や賭博など悪い遊びがなくなったそうである。

明治十七年に、旧庄屋の庭で、最初の公演を行っている。たまたまその頃、山田村（現東宇和郡宇和町山田）に、平松六之丞（俗に平六郎）といひ、徳島県美馬郡あたりの人？が、

●沿革のことなど

普段何気なくやっついていて、周囲から価値を認められ、まちおこしにつながる……朝日文楽もそんなもののように思われる。

朝日文楽の起りは、明治十二年頃、朝立地区の井上伊助が、山から木のコブシを持ち帰り、目鼻、髪、胴体を付け、浄瑠璃のさわりに合わせて、人形を動かしたことによるといわれる。



徳島から師匠を招いて指導を受け、技術も次第に向上したのである。

本格的な公演は、明治二十三年、旧庄屋の蔵の前で、旧正月に行い、終戦まで旧正月公演が恒例となつたのである。

さらに、明治四十四年、大阪の文楽の本場であった朝日座を模した、朝日座という劇場が当地に建設され、朝日文楽と座名を銘名したのである。

地区の青年にとつて、人形が遣えるということは当り前のことであつた。

### ●保存会発足

終戦を機に、急激な社会変化があつたことは周知のことであるが、朝日文楽にとつても、社会変化の波を受ける受難期であつた。

人形頭、衣装などは放置に近い状況であつた。そうした時期、昭和三十四年、県の文化財に指定されたことが、地元のみならず町全体に理解と関心を与え、朝日文楽のある朝立地区に、改めて自信と誇りをもたらしたのであつた。

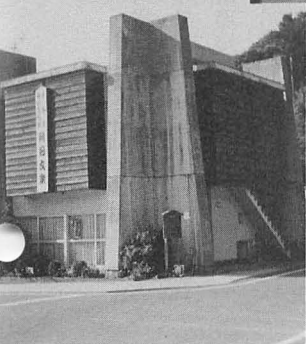
指定されたことで、町・県から保存、伝承のための支援を受けられるようになったのである。そうした中で、町内有志によつて、「朝日文楽保存会」が結成されたのは、昭和三十六年であり、以来、現在も活動を続けている。

さらに、保存会が中心になって文楽会館が、昭和五十二年に建設された。

### ●活動の状況

文楽会館が建設されるまで、地区公民館が練習場であり、人形頭、

文楽会館





井上さん

衣装などの保管場所であったのであるが、練習場の確保、保管場所の整備は、活動の新しい出発点であったように思われる。

小人数であれば公演の出来る舞台や客席もあり、町内外から見学者が増えるようになった。

人形を遣う人も、青年男子だけでなく、女性も加わって、広く町内各地から参加して練習している。

公演は、県の合同公演会、町の文化祭など、また、招聘による各地の公演もある。去る十一月には、

「文楽鑑賞ツアー」が企画され、当三瓶文化会館で公演された。

また、一般の人たちの文楽保存だけでなく、昭和三十九年には、

県立三瓶高校に「文楽クラブ」が結成され、県内数少ない「文楽クラブ」のある高校として、合同公演、自校の文化祭などで活動している。

さらに今年度は、小・中学校の児童・生徒を対象に「子ども文楽クラブ」が出来た。年度末には、老人ホームの慰問を計画している。

### ●問題と課題と

現在、民俗芸能を保存、伝承していくことは大変なことである。

朝日文楽の場合、人形の遣い手には今の所心配はない。

問題は浄瑠璃の語り手と、三味線の弾き手であるが、中でも三味線の弾き手は、県下ただ一名であり、しかも高齢者である。

浄瑠璃、三味線とも相当の年季を経ないと身につかない、高度の技術を要する

ものである。

県内で文楽があるのは、松山市の伊予源之丞と南予の大谷文楽（肱川町）、俵津文楽（明浜町）、鬼北文楽（広見町）、それに朝日文楽の五つのみである。一つの町が三味線の弾き手を育成するためには大阪の文楽劇場へ派遣することは困難であり、関係の町の協力や県の支援による人材育成は急を要するものである。

### ●文楽の輪のひろがり

#### まちおこし

まちおこしには、「朝日文楽のある町」「ニューサマーオレンジの出来る町」など、中核となるものが必要である。

三瓶町の場合、他の町村と同じように人口の減少は続いている。しかし、町を離れ故郷を後にする人々に、故郷を愛する心がある限り、文楽の輪や町をよくしようとすることは広がっていくのである。

私見であるが、そうしたまちおこしもあってよいのではないかと思うのである。故郷を想い、故郷

を愛する心の中核に、朝日文楽があることを願うものである。

毎年松山市で行われる合同公演会には、松山近辺に住んでいる三瓶出身者が大勢集まる。その人たちは、単に公演を観に来た人々とは違った熱い想いを持っているのではあるまいか。

町の中に住む人々が、故郷に誇りを持ち、故郷を離れた人々が、故郷を愛する心を抱く。その橋が朝日文楽でありたいものである。



展示場



# 五十崎の和紙

五十崎町の紙好き人

西岡芳則

大洲藩は専売制をしき、藩内で生産される全ての紙は内子町の紙買上場を、また原料の楮は五十崎町の楮買上場を通じ、藩が買い上げるようになった。以来、藩の保護奨励のもとに次第に発達し、明治維新に至るまで繁栄が続いたが、

廃藩置県によりこの専売制度が廃せられた。現在、国の伝統的工芸品に指定され、小田川の恵みのもと、書道半紙・障子紙・工芸紙等に伝統が引き継がれている。

我が身の起り

私は、高校を卒業後、松山と宇和島で鋼材販売会社のセールスをしていました。昭和五十四年秋の父の急死により、五十崎へ帰り通勤しなければならなくなりました。父が紙漉きをやっていた関係で、

で漉かなければ収入にならないということを痛感しました。

私の和紙は、楮が主原料で、当初障子紙を漉いていましたが、その後製本用紙や版画紙を初め染紙で封筒、便箋、ハガキ等も作っています。新築の壁紙用に、楮と杉の皮を繊維状にし、混ぜ合わせて漉き上げる杉皮紙も注文で作る時もあります。

紙好き人の慈び

和紙のまちを子供たちにと、先生方の協力を得ながら、五年前から天神小学校の六年生全員約五〇名が、自分の卒業証書を漉くようになりました。初めてなので、大半の児童が「できるかなあ」と不安になっていますが、実際漉いてみると案外簡単なのでホッとしています。大人になっても「紙漉きのかな」と思うと楽しみです。

牛乳パックの再利用によるハガキ作りがありますが、うす墨和紙が手早くできます。書道をされて

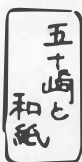
和紙の起り

五十崎町の香林寺にある過去帳に、「元禄十五年（一七〇二）壬午年五月十八日。善之進なる僧、生国は越前の福井城下近在、大洲領平岡村にて死す。大洲領紙漉の元祖なり。自然とよき紙のできることぞ妙なり」と書かれておりそれ以前から紙漉が行われていた？宝暦十年（一七六〇）になると、

いる方は、練習とか書き損じた和紙を一晩水に浸し、ミキサーで混ぜます。その後は、牛乳パックと同じ要領です。墨のニカワがありますから、浸した水は最後まで使った方が良いでしょう。墨と紙料のバランスで変わりますが、グレー系の和紙ができます。

隣の内子町に内子座があります。その内子座社中「ふれあいだいこ」（代表高田武則）のポスターを、山田清昭（五十崎町平岡）のイラストにより特注の和紙（草木染等）で、スクリーン印刷により会員十一人の手作りで製作しています。

また、八日市町並の森文甘酒茶屋で、日曜日に紙漉き体験を行っています。もみじ、笹の葉等をハガキに漉き込み、持ち帰りできます。この世に自分だけの紙しかないと思うと、おもしろいでしょう。



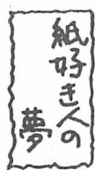
五十崎の年中行事最大のイベントに凧合戦があります。静岡県の



浜松市、新潟県白根市と並び日本三大凧合戦の一つに数えられ、人口、六、五〇〇人足らずの町が大凧合戦の日（五月五日）だけは、七〇、〇〇〇人もの観光客を迎え入れます。小田川をはさみ、旧五十崎村、旧天神村の両岸から凧を上げ、凧系に「ガガリ」という金具を付けて切り合います。五十崎の凧は和紙に独特な凧文字を書きます。凧に文字をそのまま書かず、文字の部分を残し、余白を

朱色で塗り文字のふちどりを黒くとりまします。凧が空へ上った時には文字が浮いて見えるのです。

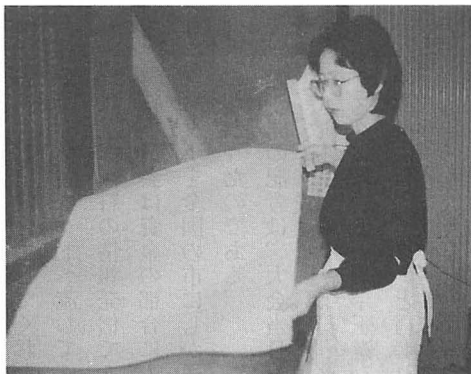
また、平成元年五月にオープンした凧博物館があります。公営としては、日本初の「凧博物館」です。木造平屋建、一、一二平方メートルの館内には、日本各地はもろろん世界中から収集した凧の展示を中心に、凧に関する幅広い資料があります。年に数回特別展を行っています。凧師の指導により凧作り体験をして、博物館横の河原で凧上げもできます。機会があれば、是非五十崎の和紙（大洲和紙）を使った凧作りをどうぞ。



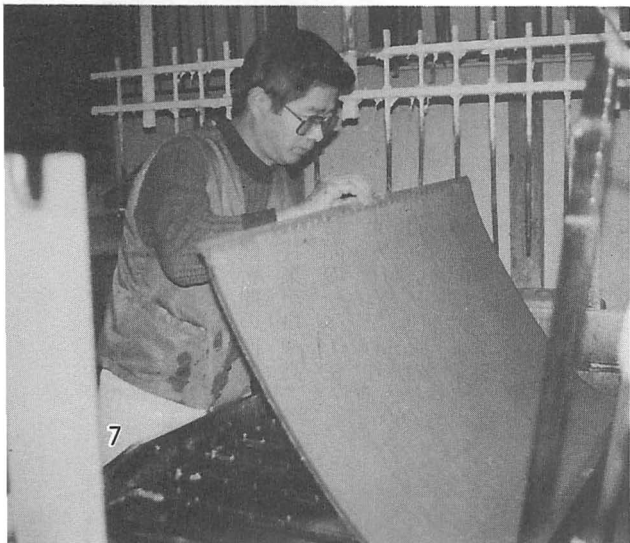
消費者が求めているもので、ブランド和紙づくりが私の夢です。例えば、洋服のように、生地、デザインナーによって、値段があるようになりたいと思っています。

PR活動の一環として、ミニ紙漉き道具で物産展に参加し、紙漉き実演や体験指導を通じて都会の

様々な人々と出会いながら、五十崎のまちづくりを模索しています。



奥さんと一緒に和紙づくり





全国からのお手玉を集め展示会に活用

平成四年九月十九、二十日、新居浜市で開催され、一応の大成功をおさめた「第一回全国お手玉遊び大会」に係わった一人として若干の思うところを報告させていただきます。

■広がる

お手玉ネットワーク■

大会以後、既に様々な動きが見られる。事務局や関係者に舞い込むお便り、大会実行委員会の中軸を務めた新居浜アメニティ倶楽部

伝統文化とまちづくり

無数の笑顔への旅

—全国お手玉遊び大会より—

新居浜アメニティ倶楽部会員

新居浜市役所 森賀盾雄

の動きなどである。

世田谷区から参加した世田谷区

民まつり実行委員の小泉珠子さんからは、来春一月より、「お手玉くらぶ」を世田谷でスタートさせることで準備中との手紙。長野県飯田市の人形劇サークル代表の女性の方からは、新居浜での大会と同じ事を考えていたので今後交流を行いたいとの電話。神戸の女子大生からは、卒論でお手玉を取り上げたいので資料を送って欲しいとの電話があり送付すると、こんなにも詳しい資料を送っていたというとの感激の手紙。各地の老人クラブからの手紙。南紀の老人ホームのおばあちゃんからは、南海大地震の時に亡くなった御主人の五〇回忌を来年迎えるので、供養のために五〇個のお手玉を作っているとの切々たる手紙。

■気持ちのよい海原■

大変な大海原に船を出したものが、だと今さらながら責任を感じるが、なんとも気持ちのよい海原である。果してこれは郷愁だけなのか。否である。参加した子供達や若い女性、男性の表情を見れば一目瞭然である。本年五月、松山の二之丸公園で、お手玉の出前をアメニティ倶楽部が行った際、三個のお手玉を二時間もかけて縫上げ、喜び勇んで帰って行ったあの少女は今どうしているのだろうか。

来年の第二回大会の開催を当然と考えているアメニティ倶楽部の面々。大会当日発足した「日本のお手玉の会」の事務局とアメニティ倶楽部のファームとなる建物

が確保されそうだとの朗報もある。

■全国情報発信の成功■

私の手元には、新聞各社の大会



森賀さん

関連記事の切り抜きが五〇ページを越えて有る。中でも愛媛新聞の四回連載特集記事や高知新聞の一ページ特集が圧巻であり、中には日本経済新聞東京夕刊版の記事もある。共同通信配信によるものだ。

他に、市内CATV、テレビ愛媛、南海、NHKもこぞって取り上げてくれた。特にNHKは、全国に周知する役割を果たしてくれた。FM愛媛も全国ネットへ流してくれた。以上、無料の情報発信である。実行委員会は資金の都合により、ポスターを全国の市にしか送り付出来なかったのである。

高知新聞の記者は、大会当日一泊二日で取材に来ていたが、聞くところ「デスクに新居浜のお手玉遊び大会の取材に行つて来いと言われていたので、「どうして新居浜でお手玉なんですか」と返すと、それが分からないから取材して来い、と言われて来ました」とのことである。



お手玉シンポで  
熱心な  
議論

■何故、新居浜でお手玉か！  
新居浜でお手玉遊び大会を行った特別の理由はあるのだろうか。私に言わせると、全国どこで手をあげて行ってもいいものだから新居浜で手をあげました、ということである。それでは納得しない人もいるだろうから、以下少し理由をまとめることとする。



団体戦  
64チーム  
勢ぞろい

柔かいイメージを打ち出すのに、お手玉遊び復活創造運動の種火が燃え上った。  
アメニティ倶楽部という小さな三十数名のまちづくりボランティア団体にとって、新居浜市のような管理性が強くならざるを得ないまちなイベントで、ボランティアのさわやかさを堅持しながら、柔



さあ！  
負けられ  
ませんヨ！

かい自主的連帯で行うイベントとしては「なんだ、お手玉か」「どうしてお手玉なのか」と言われる虚を突いたイベントが丁度良かった。あれよあれよの軽さが良かったのである。  
そうして、徐々に積み上げて来た実践が実ったことである。四年前に、市内の児童センターで、子供達とのふれあい活動を始め、以後、老人ホーム、公民館、学校でのふれあい活動へと広がり、アメニティ倶楽部の主力が女性メンバーであったため、次第に「お手玉」が交流の有力な素材として純化していったともいえる。

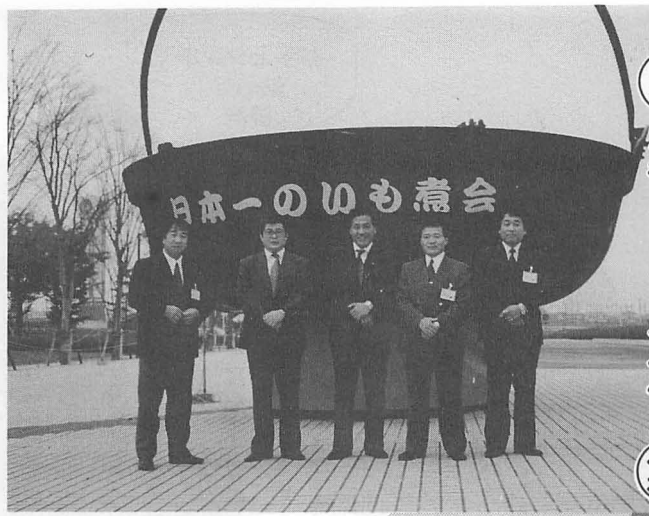
■無数の笑顔に会いたい■

大の大人が、お手玉遊び大会の準備を真剣に行っている様は、誠に可愛らしいものである。長年手にしていなかったお手玉を手にした時のおばあちゃんの表情、これはもう芸術写真もの。そこはかとなく懐かしく、ふと少女の頃のかすかな恥じらいが浮かび、そして広がる笑顔。これはすごいお手玉の威力だ。

大津市の学童保育指導員をして  
いる田中邦子さん（五〇才）は、生まれつき左手が動かない身で子供達に長年お手玉を指導してこられ、残り半生をそのために捧げる使命を持たれている方である。お手玉大会当日、「復活の日」を全身で感じられていた姿がそこにあった。

今から、十年後、全国各地で可愛らしいお手玉が宙に舞い、畳の上をはいまわる日が来るに違いない。その日に向けて、私たちは無数の笑顔と人生、そして意外な人間関係とドラマに出会うことだろう。お手玉の前史の「いしなご」を訪ねる活動も始まろうとしている。  
新居浜アメニティ倶楽部は、十一月末に湯布院への小旅行を行った。その場で次なる夢、「日本のお手玉の会」の実質化の行動提起が夜遅くまで議論された。

日本の美しい自然、日本の美しい伝承文化、心洗われる日々。それがお手玉を切り口に出会える喜び。



## 芋炊きネットワーク

大洲商工会議所青年部 菅野隆次

会で記念講演をしていただける、ダニエル・カール氏の姿も見受けられた。ダニエル・カール氏は、通訳の本業を持ちながら日本の特に東北の文化についての見識がひろく、今回も山形弁研究家としての目を通して郷土の伝統文化についてお話をさせていただくことになっていく。

つまり、郷土の伝統的文化として定着している山形の『いも煮』は、初秋の郷土の風物詩であり、抜けるような青空の下で練り広げられるのである。大洲のように夕闇が迫る頃から、秋の月を愛でながら行われるのとは、全く正反対の趣となる。

### ★芋炊き交流

東京発全日空八〇三便は、晩秋には相応しくない台風の影響で多少の揺れを感じながらも、無事山形の空港に着陸しようとしていた。機内は満席である。今回の山形訪問は、大洲商工会議所青年部の有志九人のメンバーで、『第十二回商工会議所青年部全国大会』に参加するためであり、乗客の中には顔見知りの各地のメンバーが乗り合わせている。その中には、本大

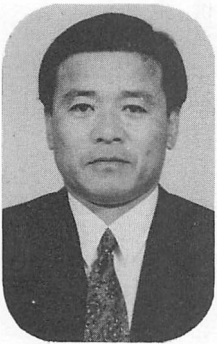
昨年、やはり山形の商工会議所青年部のメンバーから、『第3回日本一いも煮フェスティバル』に参加の要請があり、有志三人で『大洲の芋炊き』の材料を持ち込んでの訪問が思い起こされる。当時も、夏の台風の影響で、会場となる馬見ヶ崎河畔は、大量の雨水が流れ、施設の一部が流されるなどのハプニングに大わらわであったが、大会当日は台風一過の青空が広がっていた。

### ★異文化体感

大洲の『芋炊き』が、里芋、こんにゃく、油あげ、椎茸、鳥肉に、関西風の少々甘い味つけであるのに対して、山形の『いも煮』は、里芋、こんにゃく、長ネギ、牛肉を、やや濃い味つけで煮てあり、東北らしさは何える。そして、旧の十月一日の刈り上げの行事で収穫に感謝し、隣近所の結束を固めるために鍋を一つにして食べ初めたのが起こりとされている。シーズン

初めのイベントとして開催され、今年で第四回目となる『日本一いも煮フェスティバル』では、六メートルの大鍋に里芋三トン、牛肉十二トン、長ネギ三千五百本、こんにゃく三千五百枚、砂糖二百キロ、醤油七百リットル、酒三十五升、水五トン、薪六トンもの規模で三万食の芋煮を作り、市民に味わってもらおうのである。回を重ねるごとに盛大となり、今年は、十万人もの観衆を集める大イベントとして開催されたそうである。

そしてその主催を、山形商工会議所の青年部が中心となった実行委員会のもと、郷土の伝統文化として町の活性化に育て上げる努力をしている様子をの当たりにして感動した。若い力がこうしたイベントに企画、参加することで、郷土に根ざす人づくりが行われ、伝統の文化がまちづくりに繋がっていくことを痛感した次第である。



菅野さん

★我が大洲の芋炊き

私ども大洲の『芋炊き』も三百年という歴史が物語るように、郷土の伝統文化として既に根づいてはいるが、残念ながら規模で見ると日本一とまではいえないようである。

しかしながらその歴史を紐解いてみると、江戸時代から受け継がれてきた大洲独特の秋の風物詩である。この地方の「お籠り」という地区住民の寄り合いの行事のとき、町の中央を流れる肱川の河原へ、各農家から収穫した里芋を持ち寄り奥さんが洗って炊く。主人たちは、その間いろいろな相談ごとをする。炊き上がった頃は話もまとまり、老いも若きも集まり、一つ鍋を囲んで月を愛でながら楽しい一時を過ごす。素朴な親睦和の行事であり、郷土の食文化として受け継がれていたものを、昭和四十一年に、観光事業として先人たちが始めたのが現在の大洲の『芋炊き』である。

大洲市は、県下一の肱川が市の中央を緩やかに蛇行している。平

素は優しい流れも、かつてはひとたび大雨が降ると猛威を振るい大洪水となり住民を苦しめた。しかしその反面、肥えた土地を運んで大洲盆地一帯の農地を肥沃にしてくれた。これが、形、色、味三拍子揃った最良の根菜類を生産する条件となっている。したがって、丸く小さい芋が形が崩れず、しかも舌の上のにのせると、とろけるように炊き上る。これが、大洲の芋の特長である。しかも、食べる場所が肱川の河原で、手頃な大きさの小石が一面にしき詰められた綺麗な河原である。そこは、心地よい初秋の風を頬に受け川のせせらぎを聞きながらの、情景としては最高の条件のもとで繰り広げられるのである。



いも煮

山形の秋といえば「いも煮」。爽やかな秋空の下、河原に里芋、牛肉、こんにゃく、ネギなどを持ち寄り、鍋で大胆に料理する。

★今後に期待するもの

大洲にとって、『芋炊き』という郷土の伝統文化は、生産、販売、加工、つまり農業、商業、観光と三者が一体となった事業として、町の活性化に繋がっている。

最近では、こうした歴史ある大洲の『芋炊き』も各地において似たような形態ではじめられており、観光の事業としては衰退気味であるが、こうした危機感が若い地元青年を奮起させている。その手始めに、大洲商工会議所の青年部観光委員会が中心となって『芋炊きを考える会』で『芋炊き』を開いた。

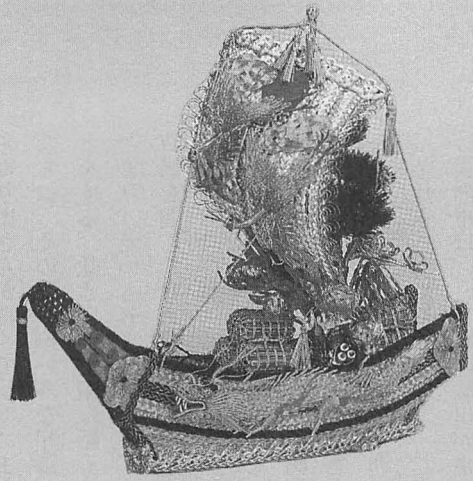
もちろん『芋炊き』をつつきながらの談義であるが、この時は一番おいしいとされる朝掘りの粒揃いの芋を調達して、いわゆるグルメに徹底してみたところ「こんなうまい芋炊きを初めて食べた」という話が出るほどであった。また、「会場となる河原の近くの『臥龍山荘』の茶室をライトアップして、もっと情景をより良くしてみてもどうか」などという意見が出たり

した。地元の青年が、こうした郷土の伝統文化を通して、お互い切磋琢磨していくことでまちづくりに貢献できる筈である。今後の活動が期待できる。

そして、『芋炊き』と『いも煮』という同じ郷土の伝統のある食文化で繋がった交流の輪、こうしたネットワークを通じてボーダレス時代に相応しい青年部の活性化と共に、素晴らしい郷土の伝統文化を継承して、今後の人づくり、まちづくりに生かしていきたいと考えている。

第3回 日本一いも煮フェスティバル 参加





## 伊予水引と伊予三島

伊予水引金封協同組合

理事長

有高三男 みつお

は帰朝の際の海上の平穩を祈願すると共に、贈り物が真心の籠った品物である事を表わしたと言われます。

以来、日本国に於いても、朝廷に献上する品物にこの風習を用い紅白の紐が掛けられるようになったとされています。この風習が一般社会に入ってきたのは、平安時代で、紙で元結を作ることが発明

され、元結を口紅で紅く染めて紅白の水引が作られるようになり、元結と共に普及し全国各地で生産されるようになりました。

### 【伊予水引の概要】

伊予三島地区の伊予水引は、江戸時代に始まった伊予紙の生産により、その紙を使用して江戸末期に元結の生産から始まり、伊予紙と共に発展してきました。その後、

明治維新の断髪令により、元結の使用が減少し、水引の生産に力が入れられるようになりました。

伊予水引の前身である伊予元結は、村松村（現在の伊予三島市村松町）で農家の副業として、農閑期に生産されたもち米を糊に多く使用する事から開始されたと云われています。

「伊予国宇摩郡地誌」の明治十七年ごろの状況からみると、旧三島地区は、未だ三島村で人口は三、九〇〇人で農家が一番多く、紙を漉く企業は四十社位で、半紙を四十万束金額にして六万円の生産をしていたようです。当時の村松村における元結の生産は、一万束で金額は千円位とあります。因みに、現在の価額に換算すると五千五百万円位となり、当時としては大きな生産高であったと思われる

ます。このように生産された元結も需要の減少に伴い、全国各地の生産地は減少しました。しかし、当地は紐の産地であることで益々発展し、元結に替わるものとして、明治末期に水引が多く生産されるようになりました。そして大正時代には、長野県の飯田市と共に全国の二大産地を形成し、今日に至っており、贈答品に使用する染め分け水引と水引細工に使用する色水引が生産されてきました。

染め分け水引には、紅白水引、黒白水引、黄白水引の三種類があり、紅白水引はお祝いごとに、黒白水引と黄白水引は仏事のお供物に使用されます。色水引は、赤、青、黄等十数種類の色があり、松竹梅、鶴亀、海老、鯛、宝舟等々の細工物に使用されます。戦時中に出征兵士を送る御見立に、伊予三島市村松町地区で開発された金封（のし袋）が使用されるようになり、現在では染め分け水引の大多数はこの金封に加工されます。

このように伊予水引は古い歴史を有し、全国でも数少ない伝統産

### 【水引の歴史】

水引の歴史は古く、推古朝の時聖徳太子の命を受け隋国（現在の中国）に渡った小野妹子が帰朝の際、隋国より日本の朝廷に贈られた贈り物に麻を紅白に染め分けた紐状のものが掛けてあった。これ



業の一つとして伊予水引金封協同組合（組合員数五十一企業、川之江市を含む）の加入業者により生産販売されています。現在の生産販売高は、約七十億円で約半分は伊予三島市で生産されています。明治初期の元結の生産から見ると随分と発展してきた事が窺えます。水引産業は愛媛県の伝統産業に指定され、水引細工は伊予三島市の無形文化財に指定されています。

### 【水引の名の由来】

私達は日常生活を営む上で、喜びにつけ、悲しみにつけ、金品の贈答を行います。その品物やお金包みの大部分は、水引で結ばれ熨斗のしがつけられます。「こんな軽粗なものです、清潔で新しいものです。どうぞご安心してお使い下さい」という意味がこめられています。水引の名の由来は、製法上から名付けられたという説と、作法からきているというものなどがあります。紙を「こより」状にした上から糊を引き、乾燥して水を引きながら又糊を引く、この工程

を繰り返す事から水引というのが「製法説」、また、チリと汚れを流し去り、水洗いした清潔な品物と同じ意味をもたすため用いることからと云いなのが「作法説」です。いずれにしても、水引をかければ一段と中味に厚みを加え、お互いの心が通い合います。

### 【水引の製法】

紙を機械で漉く事が出来るようになる前は、三楯みつたで漉いた半紙を水引の長さにより十二ミリから二十五ミリの巾に裁断し、「こより」を作り、それを撚りつないで紙の紐を作っていました。現在は、製紙工場で、機械で連続した紙が漉けるようになり、一本約三百キログラムから四百キログラムに巻き取った水引原紙（パルプを使用した和紙）が水引工場に入荷されます。これを約二百メートル位の小巻に巻き戻します。小巻にしたものを、手漉半紙と同様に十二ミリから二十五ミリ巾に切断してテープ状のものを作り、これを水で湿し撚掛機で撚りを入れると紙

紐状態になります。これを「つぐり」と称し、これを再度水に湿して本撚を掛けます。この作業は手で、紙紐状にしたものを「ツム」にひっかけて、手廻しで回転して撚りを掛けます。これを二十五メートルの長さに切り、「カネ」の用具に、太さにより百本から百二十五本を三ミリ間隔位に結び付けます。この作業を下掛作業といい、三十五センチ巾で二十五メートルの長さの帯状のものを「下掛」と称します。この下掛の一方を杭に取り付け、長さ二十五メートルの反対側より「轆轤（ロクロ）」で強く引締めて張り、未晒綿布を巾八センチ、長さ一・八メートル位の帯状に裂き、これを百筋から百二十五筋を一筋一筋編み、クレー（白土）と角又糊（海藻）をよくかき混ぜたクレー糊を、下掛の上に乗せて後退しながら、二十五メートルの間を往復します。クレー糊を附着し、綿布でこすって撚紐の表面をなめらかにし、天日で乾燥して、又クレー糊を附着し綿布でこすります。この作業を「漕（コギ）」

といい、六、七回繰り返すと白く仕上ります。これを水引の「下地」と呼びます。この作業が水引製造上最も難しいもので、長年の修行が必要とされています。紅白水引は、白く仕上った下地に必要とする寸法の野を引き、「ガンギ」（水引を一筋一筋同一間隔に保つために入れる用具）で挟み、野を引いた間隔を一つおきに、染料を混ぜたもち米の糊で染めます。乾燥後、赤の真中、白の真中を切断すると、赤半分、白半分の紅白水引が出来上ります。これが染上作業です。出来上った紅白水引を五筋または七筋を、金紙か銀紙で染め分けた所を貼り合せて一本の水引が出来ます。この作業を「中貼」といいます。水引はこのようにして作られて参りましたが最近では天日乾燥を熱乾燥に、人力を動力に置き替えた機械で製造するようになりました。

## 第2回シンポジウム「地球と鉄」 —その技術と美と生命—

研究員 国田 敦彦



ここは、日本一と言われる出雲の玉鋼を生産した「たたら製鉄」の中心地であり、昭和六十一年、村内に固有する古代からの鉄に関する文化遺産の正しい保存と正しい公開を行うために、世界で唯一「鉄の歴史村」を宣言した村である。

その後、この「鉄の歴史村」の文化的価値を高めるための活動を行なうことを基本理念とした(財)鉄の歴史村地域振興事業団が設立され、吉田村の未来戦略を担う確固とした組織が確立されたのである。その他にも鉄の文化を保存継承するための施設として「鉄の歴史博物館」「鉄の未来科学館」「たたら山内生活伝承館」などが次々と建設された。また今年五月には「たたら製鉄」を

響きわたり、包丁やナイフ、和針などが生産されている。

また、「コンベンションホール」「木の国文化館」「レストラン」「食の幸ふるさと屋」、宿泊施設「吉田グリーンシャワーの森」など文化交流、地域間交流の場が次々と作られている。

### ◇シンポジウム「地球と鉄」◇

この地で、平成四年十一月七日、八日の両日、北は青森県から南は大分県まで約二百五十名の参加を得て、第二回「地球と鉄」シンポジウムが開催された。このシンポジウムは「鉄の歴史村」の学術文化交流事業の一つとして、昭和六十一年から五年間にわたり開催されたシンポジウム「人間と鉄」の後を受けて、昨年から開催されたものである。

近な金属としての鉄と人との関わりなどについて論究を深めました。

第二回目の今回は「鉄・その技術と美と生命」をテーマとして、鉄が人間の技術をいかに推し進め、またそれを通していかに哲学的な世界像の把握に貢献してきたかを「技術と生命」及び「美」の観点から考察しようとする今まですと少し違った角度から鉄を考えようとするものであった。

### ◇技術・生命・美◇

第一日目はテーマである「鉄・その技術と美と生命」に基づき、まず、飯田賢一東京工業大学名誉教授から「人間と技術のふれあい」と題しての基調講演があった。

氏によると、技術の善し悪しは①丈夫であるかどうか②機能的であるかどうか③美しいかどうかによって決まるということであった。

次に中村桂子早稲田大学教授により「生命の歴史物語―鉄の役割も考えながら―」と題して基調講演があった。中村桂子先生といえは生物化学の分野では有名な方で、何故、鉄のシンポジウムにと思っ

### ◇はじめに◇

「今年は二十一年に一度の美しさ」と言われる紅葉を車窓に見ながら、中国山地の山深く入って行くと、そこに知る人ぞ知る島根県吉田村があった。

現代に蘇らせるために「たたら鍛冶工房」が建設され、鍛冶職人により鋼を打つ鎚音が再び



たたら鍛冶工房

「人間と鉄」が主として鉄の生産と流通の問題を、技術、社会、文化の面からとらえて検討していったのに対して、『地球と鉄』では、第一回を「鉄は何をもたらしてきたか」というテーマで行い、現代文明と鉄との関わり、また身

たが、お話を聞いて生命体における鉄の重要性について認識することができた。

鉄は微量ではあるが、三千万年からある全ての生物に含まれ、非常に重要な元素である。例えば、血液中のヘモグロビンに含まれており、酸素を体中に運ぶという重要な役目をしている。また、生物のエネルギー代謝にも関与しているそうである。

次に美術評論家篠田達美氏と造形作家窪在銀女史、建築家黒川雅之氏による「近代美と鉄」と題したパネルディスカッションが行われた。

三名とも美に関しては独特の感性を持っている人たちがばかりであり、鉄を素材にした近代芸術や建築物の例をあげながら、鉄の持つ機能と美との関連性についてディスカッションがなされた。

鉄には強くてやさしいというイメージがあり、建築家は鉄を機能的に使う美を表現するが、芸術化はその鉄を使って、機能とは無関係な比現実的な美を創造してい

るということであった。

### ◇鉄の自然哲学◇

第二日目は、宗教哲学者であり、この『地球と鉄』シンポジウムのプロデュースをされた中沢新一氏より「鉄の自然哲学」と題して特別講演があった。

氏の講演は哲学者らしい独特の感性でもって、古代社会からの鉄と人間との関わり、また音楽、数学、さらには古代シャーマニズムにおける鉄との関連性にも言及したお話であった。

この講演の中で特筆すべきことは、吉田村で七回にわたって行われたシンポジウムの意義に対する

意見が述べられたことである。

氏によると、この連続的に行われているシンポジウムの大きな

テーマは、製鉄が近代化の象徴のように考えられてきたが、たたら製鉄にみられるような古代中世から伝わっている鉄の技術を中心に鉄の問題を考え直してみようとする事なのである。そして、この鉄を近代化の象徴としてしまう一般的な今までの見解というよりも、むしろ二十一世紀に生きる新しい文明形態を創り出していくための新しい象徴に切り替えていくことはできないだろうか。つまり、十九世紀から二十世紀に展開してきた近代化の流れをもう一度考え直し、新しい方向性を創り出していく様々な模索の一つの突破口を作ることができないだろうかというのが、このシンポジウムの野心なのではないかということであった。そして、近代が大きな曲がり角にきていて、その先に作り上げてくる世界観、生命観がどういう形態になるのだろうかという模索が、様々なところで行われているが、

吉田村は鉄を通して考える村なのだという宣言をし続けることに大きな意義があるのであるということであった。

### ◇おわりに◇

鉄の歴史村地域振興事業団の藤原洋専務理事のお話を何回も伺い、一度は訪れてみたいと思っていた吉田村であったが、村内にある各施設がしっかりとしたコンセプトで作られており、吉田村の未来戦略の一部を垣間見ることができた。

よく「文化で飯が喰えるか」といわれるが、吉田村の地域づくりの足跡をたどってみると、産業振興という観点から始めるのではなく、一段高い鉄の文化という観点から始めていけば、うまくいくのである。すなわち、七年間世界的にもレベルの高いシンポジウムを開いていくうちに、今年建設された「鍛冶工房」のような産業に結びついていったのであろう。

それにしても、今回のシンポジウムを含めて藤原さんのいわゆる「知的ネットワーク」の広さに初めて驚かされた大会であった。



特別講演中沢新一氏

夢 創造 未来

「まちづくり草の根文化講演会」

魅力あるふるさとづくりを求めて

今日、日本全国様々なところで、地域の活性化に向けて、地域の資源を活かした特産品の開発や各種まちづくりイベントの開催、そして文化会館の建設など、ハード・ソフト両面から様々な「まちづくり・むらおこし」事業が展開されています。

しかしながら、「まちづくり・むらおこし」活動をとり巻く社会環境は、まちづくりの核となるテーマの選定、地域住民の意識の問題、地域資源の活用など、検討・解決すべき問題が山積みしているのも事実です。

そこで、当センターでは、地域に根ざした歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めていくため、まちづくり先進地の実践者をお招きし、県下三町におい

て「まちづくり草の根文化講演会」を開催いたしました。ここで、簡単にその内容をご紹介します。

◇栗予地域

日時 十月三日(土)

場所 土居町役場

東予地域では、健康で、潤いと活力に満ちた香り高い文化の町土居町で、地元の方々をはじめ近隣市町村からの熱心な参加者を得ての講演会となりました。

講師の藤原先生からは、今日、展開されているまちづくりや地域づくりが、果たして本当に若者の定住化や町の振興に役立つのかといったまちづくりの基本的理念についての示唆に富んだ内容の講演となりました。

「定住化のための

まちづくり」

(助鉄の歴史村地域振興事業団



専務理事 藤原洋

(講演内容から)

今日のように、ブームのように行われているまちづくりという形では、結果は何も出てこない。より本質的なものを見抜いて、そしてより効果のあるものを展開していくことが大切である。

過疎地域では、人口が減り、高齢化が進むという現状に対する危機感がある一方、人口集積地においては、人口増加に伴い住宅が増え、人が集まれる空間が無くなり、本当に住みにくくなって来ている。現状の違いはあれ、今、何をやらなければならぬかを探し出し、それを整備し豊かにしていくという方向でまちづくりを進めていくことは、共通するところであろう。現状は稲作文化にみる定住化の時代から、工業の発展による流動化の時代へと推移してきている。

人は「経済的豊かさ」「精神的豊かさ」「環境の豊かさ」を求めて移動し、豊

かさが実感できる場所を選別して定住しようとしているのである。つまり、それぞれが自分の求める豊かさを選択し、自分自身の生き方にあった地域での生活を選択して生きる「選択的定住」の時代になっているといえる。

従って、地域において定住化を考えていく場合に、いかに選択されるような地域づくりを行っていくかが重要となってくるのである。

◇南予地域

日時 十月二十四日(土)

場所 御荘町文化センター

南予地域では、「夢文化の町」をテーマに「ふれあい」「いきがい」「よろこび」のある町づくりを目指した諸施策や活動が種々展開されている御荘町に於いて、地元御荘町をはじめ近隣地域から多数の参加者を得ての講演会となりました。





講師の高橋先生からは、飯田車で取り組んでいる、「人形劇カーニバル」や「アフィニスセミナー」など文化活動の実践事例をベースとした、文化のあふれるまちづくりの重要性についてのお話をいただきました。

### 「地域文化と素敵なまちづくり」

長野県飯田市商業観光課長補佐

高橋 寛治

(講演内容から)

「地域に文化が無かったとしたら、若者が定着する訳がないし、企業がそこに定着する筈がないから、地域に文化を創れ」という言葉に表わされるように、文化は産業とともに重要なまちづくりの要素であり、この文化を発展させて

いくためには、住民の意識のボトムアップを図っていく方法を取らなければならぬ。

今、全国で様々な「〇〇の里」

づくりという活動が展開されているが、これは外向きの顔をつくっているのだと思う。まちづくりに必要なことは、内向きの顔をつくることである。つまり、住んでいる人がいい町だと思つて住み続けられるような町をつくるのが大切である。人間に人格があるように、町にも格がある。選択されるような町にならないと、本当のまちづくりにはならない。

また、行政マンの仕事は、与えられた分野のみに留まることなく、関連する部分まで枠を拡大していくべきである。

### ◇中予地域

日時 十一月五日(木)

場所 小田町林業センター

中予地域では、豊かな自然環境と文化遺産を核とした新しい町づくりが進んでいる小田町に於いて、地元をはじめ郡外からも多数の参加者を得ての講演会となりました。

講師の黍嶋先生からは、地域資源を最大限に活かした、二十数年間の愛知県豊根村の歩み等先進事例を紹介いただきながら、その手法等について大変解りやすいお話をいただきました。

### 「開かれたまちづくり 若者よ郷土に」

(財)茶臼山高原協会副支配人

黍嶋 久好

(講演内容から)

無ければないで作れば良い。ある資源は最大限に活用して、立ち度は、巧みにかいくぐる。これが豊根村の村づくりの基本である。自分たちの村づくりは動機が大変不純だった。

例えば、最初からお酒を出すつもりで村営の喫茶店を造ったり、或いは県が贅沢だと指摘してきた若者住宅団地の一戸建てを建てたりもした。

豊根村では、この他にも多くの障害を乗り越えて色々な施設を造ってきたが、そこには「施設を

造れば人が集まる。人と人の出会いがあれば何かができる」という村のしたたかな狙いがあったのである。

さまざまな努力が実つて村は確実に変りはじめた。そして気が付いてみたら、それらの施策が結果的に村づくりになつていたのである。

豊根村は過疎の村ではない、むしろ今の人口が適正だと思う。行政主導での地域おこしは、愚痴をこぼしたらきりがない。まずは実践。可能性については実践してみる事が大切である。



## 見 管見 スイスを歩いた2週間／見想録(Ⅲ)

「ヒューマンな倫理的雰囲気」 宮本俊一

◇ベルン／愉しんだ想いの休日

スイス最後の一日が自由行動となり、私はベルンを訪ねた。生まれて初めて異国の都市へ独り旅。

チューリッヒから急行列車で一時間。普通は旅と言わないが、カッコ取りの私は、表面を平静に装うだけ：内心は大変な旅となった。

しかもベルンの知識は皆無：地図さえ持たない。「ベルンは連邦政府のあるスイスの首都だが、人口は十五万。美しいが活気のない静止したような町：」と聞き、「行きたい：」と思っただけ。

だから、土佐の日曜市に似たテント・バザールや観光客で賑わう名所・旧跡と商店街等を選び、もっぱらアール川を見下ろす小径を散策。水と緑に佇むベルンの町を眺望し、「想いの休日」を愉しんだ。

◇スイス／厳しい親父のいる国

「ソォーリー、シッツ、ダウン、OK?」(：は無音のアイアム)

この調子が私のスイスでの言葉。よくぞ用を足したと思う：。私はベルンの帰路、街で道に迷い予定の列車に乗り遅れた。苦心惨憺：違うホームのチューリッヒ行きと思う列車に飛び乗り、喫煙車の席を探した。

すると、四人掛けの窓ぎわで、いかめしい初老の紳士が葉巻をくゆらせていた。「この人：」と、さきほどの怪しげな言葉をかける。とじろりと一瞥して頷かれた。ひと昔前の日本の親父の感。

そう言えば、私がスイスで見た初老の男性は、みんなこの親父型だった。何かの記憶では、他国のように国家保護を受けず、世界を相手にした商売で築いたこの国の

産業は、親父中心の家族経営だったとか：。その特異な経済体質からきた家父長制の名残り：か。

また思う。スイスは国民皆兵。

二〇才から五〇才までは兵役がある。彼らの顔は、余備役を終えたばかりの軍人顔かも知れない。

◇感動！／きびしい顔の優しさ

わたしはおそろおそろ彼の斜め

前に座り、一服つけた。紳士は知らぬテイで、時折り鋭い視線を

私にチラチラ：品定めか。実は私、

この列車がチューリッヒ行きかどうか：不安なので、彼に確かめる

心積りがあつた。もつともチューリッ

ヒに向かう列車の左車窓に移るべ

ルン郊外の風景は、ミューレン往

復と今回のベルン行きで三度も見ており、その確認をすれば紳士を

煩わすことはない。ところが車窓

の風景は見覚えがない。「そうだが

検札で判る：」とそれを待ったが、

車掌は「メルシー」の一言だけ。

「プリーズ、ジス、トレーン、

チューリッヒ、OK?」たまりかね勇を鼓して紳士に質問した。「×××、○○○、△△△」指を折り

ながら駅名らしい名を数え、最後に「チューリッヒ」と答えられた。

「サンキュー」まずは一安心。次の駅で反対車窓の席が空いたので、

葉巻を愉しむ紳士に紙巻き煙草の匂いは悪いと思ひ、手真似で席を

移る挨拶をして、紳士に背を向ける斜め前の席に座った。

発車後約一時間、そろそろチューリッヒ：と思う頃、トント

ンと軽く肩を叩かれ振り向くと、かの紳士が、手真似を交え「××、○○○……：チューリッヒ」と言

われる。何も判らないが「サンキュー」と答えると、自席に帰ら

れた。間をおいてふと、あの手真似は乗り替えでは：と思ひ、あわ

てて彼の席に行き、「次ぎのステーション、ジス、トレーン、チェン

ジ? (「次ぎの」は日本語) と問うと、「ナイン！」の答。そこで

丁寧に「サンキュー、ベル、マツチ」と挨拶をして落ち着いた。

次の駅を発車して振り返ると紳士の姿がない：。その時はじめて

「私は次の駅で降りるが、チューリッヒは後三つだよ」と、わざわざ

ぞ教えにきたと判り、あの親父が  
…の感動が終点まで続いた。

◇私も仲間／ヤバそうな一団

ミューレンからの帰路のこと。  
私はグループから外れ、ただ独り  
喫煙車に乗っていた。インター  
ラーケンから二つ目の駅か？いさ  
さかヤバそうな初老の一団。黄色  
いジャンパーにダブダブの黒ズボ  
ンという揃いのレジャー着が、ふ  
ざけながらドヤドヤ乗り込んでき  
た。私の席には誰も来ない。有色  
人種敬遠か？と思ったとたん、一  
人の髭面がドカリと私の前に、斜  
め座りをして足を投出した。

ヤバイ！と、顔を見るとまるで  
勝新太郎だ。どことなく愛敬があ  
る…。しばらく品定めチラチラ  
が続いた後、「ジャパニーズ？」「イ  
エス！」。彼は仲間たちに何か声  
をかける。二人やってきた。大男  
の一人は立ったまま「ズモ、ズモ  
…」と胸をたたく、「？」の顔を  
するとシコを踏む、「オー相撲」  
と言うや、「ヤー」と握手して去る。  
入れ替わりに来た長身のキザっぱ  
い男、色々な素人手品を見せる…。

そんな交替が三、四人続いた時、  
勝新氏が私の胸ポケットの煙草を  
見つけ、手真似で喫えと言う。喫  
煙車なのに彼らは一切煙を立てな  
いので、我慢をしていた私だ。「サ  
ンキュー」と立て続けに二本喫っ  
た。すると勝新氏は手品男を呼び  
何か言う。彼は葉巻のマジックを  
して、最後に一本褒めてくれた。

つまり彼らは、独りで淋しそうな  
異邦人をもてなしながら…自分ら  
も遊んでいるワケ。

好意は嬉しいが、正直私にはう  
るさ過ぎる。そこで勝新氏に「マ  
イ、スタデイ、ランドシャフト」  
と囁く。彼はそれに頷くと、賑や  
かに唄いながら、手踊りをしてい  
る仲間を無視し、手ぶりで車窓に  
映る美しい景観をカメラしなさい

…と、次々に教えてくれる。しば  
らくそれに従ったがツキアイかね  
る。「ソオーリー、スウイツアラ  
ンド、オール、ビューティフル。  
マイ、フィルム、ノンノン」と大  
袈裟な身振りで言うと、彼は「カ  
ンラ、カンラ」の豪傑笑いをして、  
如何にも満足そうに何度も頷き、

黙ってくれた。私には勝新氏が、  
彼の『祖国／スイス』を誇る…愛  
らしさがとても好ましかった。

思えば、一団の騒がしさも…、  
車室に通り抜けの人や車掌とか、  
車内販売が入ると、それが出て行  
くまでは静かだった。いわば私は  
彼らの仲間扱いだったようだ。ま  
た、その車内販売でも酒類に手  
出さない節度も見た。加えて私と  
彼らの間には忘れ難い小事件が起  
り、チューリッヒ駅で降りた私に  
手を振って行った男もあり、グ  
ループでは「独りの国際交流」と  
冷やかされもした。

◇共生／歩道を行く雀と観光客

ともあれ私は、この一団の男た  
ち、ベルンの帰路の紳士、市電で  
置き忘れた登山帽を注意してくれ  
た親父等々が、われながら異様な  
風体の貧相な年寄り異邦人に、何  
のこだわりもなく人間味のある心  
を配った対応をする…、そんなこ  
の国に快いやすらぎを覚えた。

『私はスイス人が好きだ。それ  
は、スイス人は、私が一緒に暮ら  
したほかのどの国の人よりも、全

体としてよりヒューマンだからだ  
…』（岩波新書／笹本駿二著『ス  
イスを愛した人びと』より）

これはアインシュタインの言葉  
だそうだが、私にはこの表現が  
ピッタリくる。私がスイスの人び  
との「醒めた市民感覚」とも呼び  
たい…品定めに始まる人間らしい  
応対に想うのは、その風土と人び  
との歴史が、ルソーの言う「自己  
愛」を社会化し、ヒューマンと表  
現される『良心』を産み出して、  
それが理性を媒介に独特の『共生  
と連帯』という…人間生存の基本  
的命題を体験的に生活化し、スイ  
ス社会の倫理的雰囲気として醸成  
してきたのだろう…ということだ。

その風土と人びとの歴史への想  
いは次号に譲るが…、チューリッ  
ヒ湖が街側に接し、自動車や市電  
が輻輳する幹線道路。その観光客  
の往来が激しい湖畔側の歩道で、  
ふと足元を見ると、一羽の雀が人  
びとの股の間をピョンピョンはね  
ながら、巧みにくぐり抜け私の前  
を行く。彼らの『共生』は、雀に  
までおよび…理解されていた。

# 「地域づくり西日本交流会議益田大会」

一 出会い・ふれあい・学びあい

えひめ地域づくり研究会議代表運営委員

## 若松進一

初夏から初秋にかけて、ほたる祭り、みたと祭り、夏祭り、夕焼けコンサートと、超ハードスケジュールでまちづくりイベントをこなしてきた心の疲れを癒すべく、「地域づくり西日本交流会議益田大会」に日程を合わせた山陰の旅を、米湊君と二人で計画した。

いつも安上がりな旅を身上とする二人は、例によって私の幸せを求める黄色いアルト（軽四輪）に、野宿覚悟のあれやこれやを積み込み、久し振りに中国山脈を越えた。途中、一度は訪ねてみたかった藤原洋氏の吉田村に、施設の運営計画を学ぼうと立ち寄った。藤原氏はあいにく出払っていて会うことが出来なかったが、アカデミックな施設の数々を目の当たりにし、氏の苦心と知恵を垣間見る思いであった。

紙面の都合で全体をルポする余裕もなく、①出会い、②ふれあい、③学びあいの二つの角度で感じたことを述べてみたい。

### 一、出会い

今回の交流会で出会った人々の中で特に心を許したユニークな二人を紹介しよう。

#### ◇平井悦夫さん

広島県の東部に位置する新市町（人口二三、〇〇〇人）の公民館（主事平井さん（みんなでシンポの会代表）は、カンサカとの出会い

によって地域づくりに目覚めたと言う。以来全国の研修会に参加することで能力を高め、未力人間（みりよくにんげん）交流マーケット、ガリバーの替えズボン、ロマンティック街道313など様々な活動を展開しているが、毎日三通のハガキを出すなど人を大切にすることに心掛けている。暖かい人間味ある語り口は、実戦者のみが持ち合わせる論理人である。

#### ◇明佳和さん

富山県企画調整室主任の明さん

は、人物こそ普通の県庁職員だが、事務局となって富山で行っているコロナプス計画が非常にユニークである。

特に、コロナプスネットワークを使って、七月五日に開局したJ E T I F M放送局は、九月二十七日の閉局までの八十五日間、「出るラジオ」を合言葉に、一日十三時間の生放送で延べ一、四八二人が出演し、素人集団ながら多くの感動と成果を得ている。

### 二、ふれあい

今回の益田大会は、益田市を主会場としながら益田広域圏の各地に十一の分科会場を配置し、ふれあいの場を身近なものにしたことが特徴といえよう。

私達が訪ねた日原町は、日本で最大級の口径を持つ天文台があり、ユニークなまちづくりを進めている。この日原町でまちづくりの悩みを語り合い、組織の枠を超えた地域づくり活動の新しい挑戦手法、まちづくりの推進主体を模索した。またつい最近、第三セクターや株

式会社によるまちづくりの熱意主体づくりが盛んだが、このような事例を交えて、地域の人材育成論についても大いに語り合ったことは、大変参考になった。

日ごろ何気なく活動に参加している日原町の草の根町民リーダーたちは、中学生をも動員して、ふだん着で夜の更けるのも忘れ心のコもったもてなしをしてくれた。日ごろ会うことのない西日本の活動家にあれあって、明日への自信がついたと述べた奥さんの顔が心に浮かぶ、ほのぼのとした分科会であった。

### 三、学びあい

「見聞、いま地方からの発信」と題して基調講演した富山県利賀村宮崎道正村長の話は含蓄のある話であった。

終戦時三、五〇〇人いた人口が一、一〇〇人に減少している利賀村は、開かれた村を目指し武蔵野市、ギリシャ、ネパール王国クチェ村と交流する一方、芸術文化の里、そばの里、瞑想の里、歴史

文化の里など拠点づくりを積極的に進め、それらを利用して山村特有の心のこもった四季を通じたイベントを手掛け、世界演劇際、世界そば博覧会など交流人口を増やしている。

豪雪に悩む過疎の山村をユートピアに蘇らせた村長は、イベントと村民の関係について、「閉会后、村民が楽しかったと思わなければ長続きしない」と語ったし、「そば祭りに一四五人のボランティアを全国の大学から募集したたかさが、利賀村に思いを寄せてくれる外なる人をつくってゆくのだ」とも語った。

結局、自分の町や村の足元にはいろいろな資源が落ちているから現状を嘆かずしっかりと見詰め、知恵と力を発揮する努力をすれば必ず道は開けると、小さな利賀村の大きなまちづくりの話を感動的心をもつて聞かせてもらった。

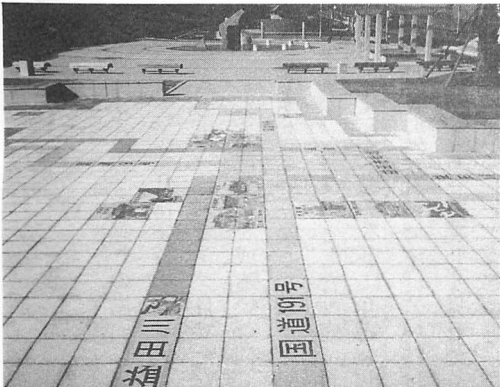
たった四日間の短い旅であったが、車窓に映る総てが新しく、学びの心で見たりふれたりしたことは、心に乾きを覚えているからか

もしれないと思った。

訪ねた町、知り合った人々、益田の旅は何かを二人の心に残してくれた。



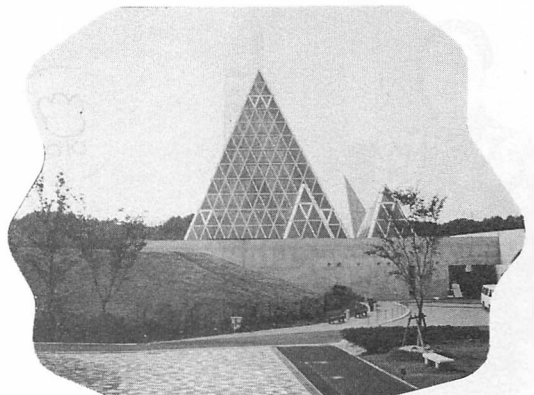
益田市『雪舟の郷記念館』



益田市『道の駅』



吉田村『鉄の未来科学館』



仁摩町『サンドミュージアム』

# 装いごとやめごと

## 松山市 宮崎紀子

「服装は民族の表出であり、民族間の交流によって発展してきている」と教わった言葉をよく思い出します。戦後の何もない時代、若い日本の女性達は自分を表現するため、または自分で製作する夢から、全国津々浦々に洋裁専門学校なるものを作らせました。これは必然的要請の結果であったと思います。

その全盛期の人材養成によって、現在ヨーロッパで活躍している素晴らしい日本人デザイナー達を生んだのです。服飾歴史の長いヨーロッパのデザイナーと伍して、ファッションを創り出せる事は、歴史でなく日本人の美に対する感性の豊かさによるものであると思います。

日本の高度経済成長と同時に、既製服が始めると女性の進む道も又違ったものになりました。女性が、家において着るものを作るといふ仕事の比重が変わり、女性の社会進出と既製服は、相乗効果よく

女性の生活を変えていきました。それに、マスメディアの普及で、世界のファッション情報が、その日のうちに見ることが出来ます。又、ヨーロッパのショーのドレス等がシーズンには手に入るなど、私達が勉強をしていた時代では、考えられないスピードで日本の女性を美しく変えてきました。

「小出楯重」描く裸婦とは異なり、街行く若い人達はプロポーションも良く、もう完全に洋服の体型です。

カジジュアル、タウンウェア等は、上手に自分のスタイルに作り上げていますが、洋服のマナーは、目的もさることながら時間によって格をかえる習慣のあることも理解しておかなければなりません。

既製服は、オーダーメイドと違い、個性を消してしまっただころに成立します。個性の代わりに、モードとサイズが与えられています。そのため、ときとして右へ倣えの

制服を見るような感じの場面に出会います。それは学校の入学式や卒業式の黒い行列です。目立たないことを美德とし、或るいは同じ服装であるという安心からだと思えますが、ちよつとした配慮で自分らしさを表現する事に勇氣を出していきたいものです。若い時は、何を着ても若さで美しく見せてくれます。更に年をとっても美しくあるためには、原理原則を知り、自分なりの思想を持ち、年を重ねることで、独自の個性と魅力が生まれその人をつくりあげているように思います。

県下の素晴らしい大勢の女性とお仕事や趣味を通してお付き合いをさせて頂いた中で、その方々の美しさは装う事だけでなく、仕事や家庭にもしつかりとしたポリシーを持ち、「やさしさ」が、その人を美しくさせていることに気が付き教えられました。その心のやさしさが、二十一世紀に向かって、寛大で他人をも愛する連帯意識や魅力ある美しい国際女性をつくりあげてくれるのではないかと思いま

す。

今回は、松山地裁、家裁の調停委員で外科医であり、また、作家でもあられた、故玉貫寛夫人陽子さんをお願いします。



# 医学史の道

## 宇和島市 清水 英

前回の森廉一郎先生が、俳人富沢赤黄男を書いておられたので、赤黄男の曾祖父で宇和島藩々医の富沢礼中（一八一―一七三）について述べたい。

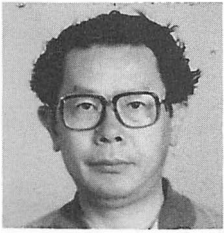
礼中は伊東玄朴の高弟で、弘化四年二月、江戸で伊達氏正姫に初めて人痘接種に成功。（宇和島藩最初の牛痘接種は嘉永二年）嘉永元年春、高野長英を伊達宗城の命で宇和島まで護導した人物として有名である。藩蘭方医の開祖で領内のコレラの予防治療に活躍したが、文久三年、礼中は持病の眼病難儀のため隠居願を提出、家督を倅松庵に譲った。五十三歳であつた。

住居は現在の桜街にあつたが、戦後の区画整理と町名変更の前は、富沢邸の通り一帯を富沢町と呼んだ。富沢町の脇を流れているのが神田川で、富沢町の通りが、川のカーブに沿わずに真直に伸びた角の三角屋敷に、シーボルトの娘で

日本最初の蘭方女医楠本いねが嘉永七年頃住んでいた。富沢邸から二十数メートルの距離である。

神田川の兩岸を囲む道は、宇和島の医学史の道と云つてよい程史跡に充ちている。神田川に架かる御通橋のたもととの三角屋敷は宇和島藩で最初に、大阪適塾で医術修業をした林玄仲の住居。泰平橋を渡つて正面に曹洞宗の泰平寺がある。泰平寺には、華岡青洲流の外科医として藩に仕えた熊崎寛哉の墓がある。その他藩医富沢家の墓、小早川活水歴山の墓、礼中の門人で最後の蘭方医として名声をはせた八島星海の墓がある。

神田川原の戸板口には、村田蔵六（大村益次郎）の住居跡があり、ここに藩の学問所もあつた。楠本いねは蔵六の門人であつた。神田



川原を川沿いに進むと妙典寺前との境界に小川が流れている。

これを谷川と云い、神田川原谷川付近に、楠本いねの娘タカと三瀬諸瀨が世帯を持った新居があつたことを知る人は少ない。慶応二、三年頃である。そこを逆戻りして勸進橋を渡ると、元の富沢町の出発点になる。医学史の道を一巡した。

ところで最近、礼中の漢詩を『振洋先生詩稿』の中から発見したので紹介したい。

富沢大眠、柳の詩を作りたて次の韻を見示す。

官情日に浅く、逸情多し。  
病の枕に空しく成る懊悩の歌。  
人の眼は揚柳の眼に如かず。  
幾年ぞ、微妙として春を背に和やかなり。

（五官の力が日に衰え、放逸な感情が多く生じて心が乱れる。病中で手すさびになる苦しみの歌も空しい。しよせん人の眼は、河柳の眼差しには及ばないのだ。幾年も微妙な花をつけ、春を背にして和やかに立っている。）

富沢大眠（礼中）は若年の時から持病の眼疾に悩まされた。官を

早く辞したのもその為で、晩年は寂しい思いをしたであろう。揚柳はカワヤナギで別名ネコヤナギ。早春、葉の前に白い穂の花をつける。神秘的な花である。勸進橋のほとりに年を経た柳が昔あつたのを覚えていいる。

次回は瀬戸町で活躍中の佐々木豊彦先生にお願いします。

左は、旧富沢町の通り。左のイブキのある家が楠本イネの住居跡。通りの右側に立っている電柱の2番目に富沢邸（現保木口氏の家）があった。車がやっかと通れる位の細い路となつた。



# 元気印レポート

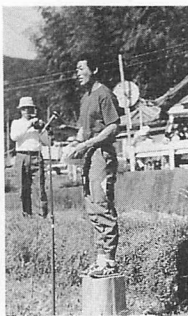
## ささな 篠南の天狗がまさき 正木を 変える

一本松町

篠山クラブ会長  
松本義員



『どろんこ板渡り』



松本会長  
開会式で  
挨拶

私たちのシンボル、霊峰篠山ささやまが聳えたつ里、それが私たちの愛するふるさと正木まさきです。

一本松町正木地区は、松山市から車で三時間三十分。篠川をはさみ、高知県宿毛市に接した地区です。地区の人口は、四二三人、世帯数一四〇戸です。この正木地区には、全国で一番長い『愛媛県南宇和郡一本松町高知県宿毛市篠山小中学校組合立篠山中学校』という三十一文字の学校があります。

そのほかに、シヤクナゲ、アケボノツツジなどの自然林を有する国立公園篠山があります。

### ●篠山クラブ結成

篠山の南側に位置する正木地区と宿毛市山北地区を合わせて篠南地区といえます。県を越えて、お互いに協力しあうことを目的に、篠山クラブが昭和五十年に結成されました。

篠山クラブでは、今まで、篠川清掃、町主催のスポーツ行事への参加、四百年ほど続いている花取り踊りの伝承のほか、盆

踊りなどの地区内全ての行事を行っています。

地区の人たちのふるさとに対する愛着や情熱を高め、篠南地区で何かみんなで燃えるような感動するものをつくりたいという有志が集まり、話し合いをもちました。

その中で、地区の自然や歴史に基づいたもののほうが、地区の人々の共感が得られやすいだろうということの基本において考えました。

篠山は、室町時代から予土国境の境界争いがあり、一八七三年六月に伊予・土佐国境において協議

し、「篠山下り北を高知県に、東・南・西を愛媛県とし、沖の島・鶴来島・姫島を土佐に渡す」という

ことで長きに渡った《篠山騒動》に終止符が打たれた経緯があります。また、篠山信仰も盛んで、本

町は山の神様として、そして南宇和全体では、海の神様として崇められてきました。そして、本町の

中でも、土佐の風土の影響を受け、気さくな人柄と厚い人情によって発展した地区でもあります。

以上の地区を取り巻く歴史的背

景をどう活かしていくかが一番の問題でした。

### ●どろんこサッカー

そこで、美しい篠川を利用出来ないかということで、イカダで川を下ろうということになり、自作のイカダでレースをしました。その結果、川底が浅く、イカダをこぐというよりはイカダを担ぐということ、スタッフ一同大変疲れ、これはダメだと全員の意見が一致。しかし、このような過程が一番面白く楽しい時間だったように思います。

そうこうするうちに、篠山騒動という出来事を騒いで動くと解釈して、「騒いで動く」とは？丁度その時、南宇和高校サッカー部が日本一という嬉しい知らせに湧いていたこともあり、田んぼでサッカーをと「県境篠山騒動どろんこサッカー大会」が企画されました。

交通の便の悪い辺境の地の高校が、都会の高校と違い様々なハンディを背負いながら優勝したということにより、「やれば出来る」と



勇気づけられたスタッフは、こ

れで篠南地区をアピールしようと  
意気込み、イベントの中身をどう  
するかという方向へと話が進みま  
した。イベントの狙いとしては、  
「篠南地区に住んで良かったな」

という満足感を、精神的にも物質  
的にも満たすことを目標としてい  
ます。精神的とは、目に見えない  
もの。物質的とは、特に景観の中  
心として目に見えるものという捕  
え方をしています。

第一回目のイベントは、サッ  
カーを中心として、「どろんこ板  
渡り」や「特賞中古自動車のお楽  
しみ抽選会」などの催しでした。

企画広報する中で、愛媛県は宇和  
島市、高知県は中村市までという  
ことでチームの募集を開始、初め  
はなかなか集まらず、スタッフ一  
同、会話の少ない日々が続きまし  
た。「絶対来る」という思いだけが、  
心の救いでした。イベントの三日  
前になって、高知県六チーム、愛  
媛県十四チームの計二十チームが  
揃い、ほっと溜め息が漏れるよう  
な安堵感でした。

### ●情熱・感動・自信

スタッフは自分の仕事を済ませ、  
毎晩集まっては、寄付集め・看板  
作成・ポスター配り、本当に大変  
でした。あんなに疲れたことはあ  
りませんでした。しかし、みんな  
の目的意識が統一されていたこと  
もあり、心地よい疲労が残りました。

地元住民の方に、説明会を重ね  
る中でスタッフの情熱が通じ、初  
めは反対する人もいましたが、「よ  
し、やってみよう」と言ってくれ  
ました。人の意識を変えるのは大  
変ですけども、やはり、お金でも  
地位でもない、情熱・思い込みの  
強さの度合いが一番大切だと思  
いました。イベント当日までには、  
何回もこのような感動があったこ  
とが成功の最大の原因だったと思  
います。

そして、昨年は、初めて地区に、  
地元住民を上回る500人。今年  
は、一、000人の人達が訪れて  
くれました。イベントの成功・失  
敗は、入場者の数ではなく、イベ  
ントに携わった人達が、どれだけ

感動したかということが大切だろ  
うと思っています。そのためにも、  
イベントを仕掛ける側が、感動を  
演出することを忘れてはいけな  
いと思います。この手作りのイベ  
ントの中で、感動と自信がみんなの  
心の中に残ったと思います。過疎  
に悩む農山村の中の篠南地区が、  
そこに住むことで喜び、安らぎを  
感じる事が出来る環境をつくる  
ために、このイベントを通して取  
り組んでいきたいと思っています。

今後は、もっと町全体を巻き込  
んで、地元の特産品を開発してイ  
ベントでPRしたり、高知県宿毛  
市との交流をどう形にしていくな  
か、自然を生かした住みよい環境をど  
うつくっていくのかなどの様々な  
問題や現状を変えていくため、「県  
境篠山騒動どろんこサッカー大  
会」というイベントの中で、考え  
実行していきたいと思っています。  
最後に、地区予選大会をご希望  
の方は、私までご連絡して頂けた  
らと思います。



『どろんこサッカー大会』

# 元気印レポート

## 文化の香る村を 夢みて

内子町・大瀬村の会代表  
徳 森 益よしかず

地・成留屋地区である。この成留屋を見渡せる小高い丘に上がると元来人間が安心して暮らせる所、守られている所だと感じることが出来る。

この大瀬は、昭和三十年に内子町に合併するまでは大瀬村と呼ばれ面積約五二畑、人口約五八〇〇人が暮らす、のどかで独自の文化を創り出してきた山村であった。しかし合併後、高度経済成長を機に過疎化の波が襲いかり、地域の人々の考え方が、「心」から「モノ」や「金」へと移り、暮らしを変え、村の姿や性格までも変えてしまい、人口約二、六〇〇人にまで減少してしまった。

このような中で、私達も昔の大瀬が持っていた良さや活躍ぶり、将来への不安など地域の事を真剣に考え、話す機会が多くなってきた。

### ●動機

そんな昭和六十三年十一月十八日、郷土出身の文学者大江健三郎さんと話す機会があった。

大江さんは、母校の内子町立大瀬中学校の生徒達に教えるNHKの『授業』の収録のため帰郷中であつた。

小田川で捕った鮎や川蟹などを肴に酒を酌み交わしながら、日頃から感じていた事を酒の勢いで喋ってみた。すると、「行政や政治の力を借りないで我々の出来る事から始めましょう。まずは、私の友人の音楽家による音楽会をやつてはどうですか」と、快く大江さんが提案して下さいました。

予期せぬ言葉に、私達はただ呆然となった。それと同時に、今まで郷土出身でありながら、雲の上の人だと思っていた大江さんが、身近な人に感じずにはいられなかった。

### ●活動

早速、地域で暮らす三十代から四十代の会社員や商店主、農家、造園業、公務員などに呼び掛けたところ十二名が集まった。

会の名称については、大江さんの兄である大江昭太郎さん（平成元年四月に他界）が、名付け親と

なって『大瀬・村の会』とした。この会名には、「今まで築き上げてきた素晴らしい大瀬の伝統を守り、未来に輝く大瀬を創ってほしい」との昭太郎さんの願いや期待が入っているものと感じながらスタートした。

私達は、むらおこしやまちおこしをするのではなく、地域の人々に谷間の村にいても素晴らしい中央の文化に触れてもらおうとの思いから平成元年十一月十一日に大瀬小学校体育館で、「谷間の村の文化を」と題し、ギタリストの莊村清志さんを招いての、初めての音楽会を開催した。

今まで、このような催しを開いた事のない素人同志、手探りの状態で、不安と期待が入り交じった中、地域内外から約五百名の参加者があり大成功であった。その事が新聞、テレビ等で大きく取り上げられた事もあり、反響は大きく、その反響に私達自身戸惑いを感じ、今後の活動への不安で押しつぶされそうになった事もあった。しかし、大江さんが色々な所で私達の

『私は子供の頃、高い所に登り村を見下ろすのが好きでした。そして山を見て、自分の先祖がどうしてこんな山奥の小さな谷間に向かってやってきたのだろうか』（十月八日、「鎮守の森」の音楽会での大江健三郎さんの講演より）

### ●地域の概況

『木蠟もろうと白壁の町』内子の中心から国道三七九号線を東へ約一〇km。四方を山で囲まれた谷間に清流小田川が東から西へ蛇行しながら流れて作り出した小さな平地（通称、谷間の村）が現れてくる。ここが、私達の住む大瀬の中心

事を話題にされ、また帰郷されるたびに私達への暖かい心配りを感じ、触れながら、賛同する仲間を十二名から十六名へ増やすことが出来た。そして、平成三年三月三十日、「語らいと音楽会」と題して、アマティー室内合奏団四人を招き、

### ●変化

こうして、小さな石の起した小さな波紋が、少しづつ地域の人々の意識を変化させたように感じる。そして除々に、行政が私達の活動を注目するようになってきた。

その一つとして、平成三年度より始まった『素晴らしいふるさとづくりを』と、行政の音頭で地域づくり事業がスタートした。そして、私達の地域では、地域住民によるモミジなどの景観木の植栽やサルビアなどの花いっぱい運動へと進んでいった。

二つ目は、河内町長の決断による、学校教育機能施設だけでなく、社会教育機能も兼ね備え、大江文学の里にふさわしい「内子町立大瀬中学校」の建設が挙げられる。

設計は、大江さんの友人で東京大学教授の原広司氏によるものとなった。また、地域住民も立派な学校にしたいとの意気込みにより、小田川の小石や旧校舎の瓦を敷き並べ、中庭を奉仕活動で作らあげた。原氏自身も『大江文学の舞台』にふさわしい建物を建設したいと、並々ならぬ力の入れようであり、自然の中で建物が呼吸しているかのよう

に完成した。大瀬中学校の完成を祝う形で、平成四年十月八日「鎮守の森の音楽会」と題し、ギターリストの莊村清志さんやピアノリストの江戸京子さん、ヴァイオリニストの瀬川祥子さんを招き、第三回目の音楽会を開催した。また、併せて、小学四年生から中学三年生の子供達を対象に大瀬中学校音楽堂にてミニ音楽会も開催した。

当日は、ノーベル文学賞発表の日と重なり、県内外から百五十名以上のマスコミ関係者がやって来て、大瀬地区はもろろんのこと、県内でも滅多に見れない情景だった。しかし、私達にとっては音楽会が

終了し、ノーベル賞が発表される間、緊張の連続であった。そんな私達の様子を渦中の人である大江さんは、楽しんでいらっしやるかのようにであった。

### ●今後

会を組織して四年を迎えようとしている。私達を取り巻く環境も大きく変化してきた。まだまだ、一人立ち出来ないで多くの人々に支えられている。活動の基本は「大瀬のために何かしたい」「大瀬を良くしたい」である。そして、自分達の子や孫が谷間の村で自信を持って暮らせる地域になって欲しいと願っている。

大江さんは、私達を「僕達、友達なんです」「仲間なんです」と言っただけで、この言葉の意味を、理解しながら、「空のすみゆき、鳥のとび、山の柿の実、野のたり穂、それにましても、あさあさの冷たき霧に、肌触れよ。頬、胸、背中、わきまでも」(中野重治作)のような地域にいても、文化の香りがする谷間の村を創って行きたい。

(大江健三郎さんとの懇談風景)

『私は大瀬の生家に帰って来た時、朝早く起きて裏の川沿いに行き、川向こうの森を見たりします。そして何を最初にするかというところ、どうも深々と呼吸をしてしまいません。しかもその呼吸がこの土地の呼吸と一致している感じがするのです。』(「鎮守の森」の音楽会での講演より)



## 家庭のお風呂で 温泉気分!

玉川町

温泉と美術館の町、玉川町に新たな名所が誕生しました。その名

もなんと「温泉スタンド」。百円で百リットルの温泉が、給油いや給湯できます。

町特産のヒノキをふんだんに使い、瓦葺入母屋造りで建てられた「温泉スタンド」は、伊予の仙境「純川温泉」の入り口にあります。そして、その泉質と効能は、ラドンを含んだアルカリ性単純泉で、あせも、神経痛、疲労回復はもちろんのこと、肌ざわりが良くなめらかで、美人をつくる不思議な湯と

して親しまれています。

是非皆さん、春は桜、秋は紅葉と四季折々の自然を楽しむことができる、「いで湯の里・玉川」にお越し下さり、イノブタ鍋で腹一杯になった後は、ゆっくり温泉に入り旅の疲れをいやして下さい。そして、お土産に「温泉スタンド」でお湯を持ち帰り、家庭のお風呂でもう一度温泉気分を味わってみてはどうでしょうか……。

## 今、双海の夕日が美しい!!

〈夕日・夕焼けフォトコンテスト〉

## 作品募集中!!

双海町

行っております。国道三七八号線が整備され、海岸線には色とりどりの花が咲き誇るなど、潮風と夕日と人情豊かな双海の町が、あなたの作品を心よりお待ちいたしております。

### 《応募要領》

水平線にジューンと音を立てるように沈んでゆく美しい夕日や四季折々の自然を詩情豊に染め分ける夕日をイメージした「第二回夕日・夕焼けフォトコンテスト」を

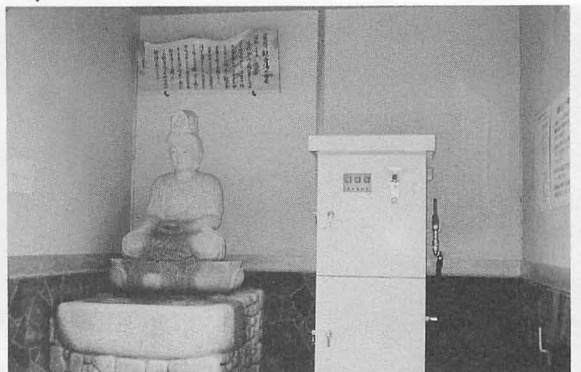
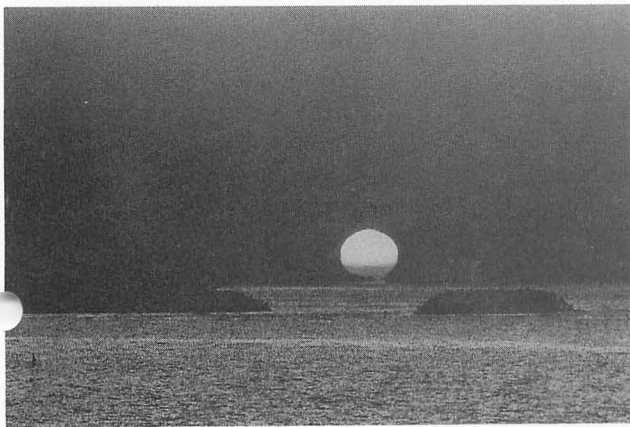
- 作品／未発表の作品に限る
- 受付／平成5年3月3日まで
- 対象／町内の夕日夕焼けの作品
- 応募／四ツ切カラープリントで裏に住所・氏名・題名・撮影場所・撮影年月日を貼付。応募点数

制限なし。作品は返却しない。入

選者はネガ提出のこと（提出なき場合は、入選を取り消します。）

- 入賞／特選5万円（2点）・準特選3万円（2点）・入選（5点）
- 問い合わせ・申込先／伊予郡双海町役場 企画調整室「双海の夕日夕焼けフォトコンテスト」係

☎ 〇八九九（八六）一一一



「地球の学習室・城川町  
地質館」オープン  
城川町

城川町は、日本では珍しい古生代シルル紀の化石や岩石が分布することで広く知られています。その特異な地質は「黒瀬川構造帯」と名付けられ、これまでに数多くの

調査研究が重ねられてきました。城川町の前身である黒瀬川村の名が冠されたこの構造帯は、九州から四国・紀伊半島を経て関東山地に至る細長い大断層帯です。また近年、最新の地質学理論であるプレート・テクトニクスを裏付ける地質として、国際的にも注目を集めています。

「黒瀬川構造帯」の謎を通して、地球の成り立ちを分かりやすく紹介した城川町地質館が、この十月にオープンしました。館内は、町内産の化石や岩石はもちろん、海

外の美しい化石や鉱物も展示しており、見るだけでも楽しい施設にしています。城川町の有する偉大な地球の遺産と、人知を越えた自然の営みに触れることで、私達の地球が持つ悠久のロマンをお楽しみ下さい。



“大空へ  
ティクオブ”  
新宮村

近年、若者に非常に人気の高いスカイスポーツ(パラグライダー)が、本村塩塚高原で行われている。村内でも地元の若者を中心にクラ

ブが結成され、村の活性化、イメージアップに貢献している。日曜祭日ともなれば、四国内はもちろん、遠くは中国地方からもマニアが訪れ、色とりどりのキャノピーの花が咲き、一〇〇人以上の人で賑わっている。

こういった中、地元を中心に近隣市町村より「一度飛んでみたい」という声が多く、今回地元のクラブに対し助成金を交付し、パラグライダーの機体を購入する運びと

なった。

第一回目の体験スクールは、十一月一日に行われ、以後は毎月第一日曜日に行う予定である。

「パラグライダー」一日体験スクールを希望される方は、新宮村役場、産業振興課までお問い合わせ下さい。

☎ (〇八九六) 七七一二二二一





# Town タウン

パソコン通信ネットワーク

## パソコン通信に 失望された 方へ!!

Vol.26

Human Communication & Network



### ECCC

Ehime  
Computer  
Communication  
Club

えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

パソコン通信を始めてはみたものの、面白くないのでもう止めたという方が多いようです。面白くない理由は人それぞれだと思いますが、ほとんどの場合、最初から大きな期待を持ちすぎているうちに、明確な目的もなく、ただ面白そうだからやってみようというだけが始めた方が多いようです。

そこで、パソコン通信を正しく理解して、上手に活用していただけるよう先輩たちのアドバイスを二、三ご紹介します。

手段と目的を取違えている人が多いみたい。

パソコン通信はあくまでも通信手段であって、目的はほかにある

はずです。ちなみに私は、東京に行っている友達数人と電子メールで近況を伝えあったり買物を依頼したりして、電子メールを主に利用しています。

受け身ではダメですね。

パソコン通信のフォーラムも、日常の交友関係と同じです。話題が多く、情報の豊富な人の周りには人が集まっています。仲間に入ろうと思ったら、自分も努力して情報を収集し、提供できるくらいにならないと認めてもらえない。結局、人と人との付き合いというのは、付き合う手段がどう変化しても基本的なところは変わらないんじゃないかな。

本当の面白さは、お互いのコミュニケーションというか、人との触れ合いの中でしか味わえないように思います。

パソコン通信で行われているいろいろなサービスにしても、他の方法で十分間に合うものが多いし、フリーウェアにしても、最初は面白そうだとダウンロードするが、その大部分は使わずに貯め込んで

いるだけ、そのうちに飽きてくる。共通の話題をもっている人を見つけて、思い切って電子メールを出してみてください。きっと展望が開かれると思いますよ。

## TOWNの住人(会員)の みなさんへ

### お詫び

先日、ホストコンピュータの保守管理のため、一週間にわたってシステムを停止させました。その間、ご不便をおかけしましたことをお詫びいたします。

なお、システム停止の予告は、一週間前から掲示板コーナーで行っていましたが、見逃された方も多かったです。システムの運営に関する連

絡は、今後とも掲示板コーナーで行いますので、一週間に一度程度は、掲示板コーナーにアクセスをお願いします。

### お願い

最近、TOWNで見かける顔がめっきり少なくなりました。気軽に声を掛け合い、お互いの親交と出会いを楽しむホットなTOWNづくりが停滞しています。家にこもらず、一週間に一度程度は、TOWNに出掛けて、心を開いてみてはどうでしょうか。

## えひめ地域づくり研究会議からのお知らせ

去る11月14日(土)、松山市道後のにぎたつ会館で、大分県大山町の緒方英雄氏を記念講演の講師としてお招きし「えひめ地域づくり研究会議・92年次総会フォーラム」を開催しました。

総会では、92年次が運営委員改選の年であったため、「運営委員推薦委員会」より下記の方々を推薦され、運営委員として承認されましたのでお知らせします。

なお、フォーラムの内容につきましては、次号で報告の予定です。

(任期1992.11.1～1994.10.31)

	氏名	所属		氏名	所属
代表運営委員	若松進一	双海町役場	運営委員	豊田 渉	中島町役場
	守谷和久	(株)都市計画研究所中・西国(川之江市)		渡辺 浩二	久万町商工会
	高須賀 忠 篤	農業 (内子町)		安川 徹	内子町役場
運営委員	白石高啓	ゆにて設計事務所(新居浜市)	亀岡 徹	亀岡酒造(五十崎町)	
	山内雅明	丹原町役場	河島登紀	TOKI事務所(五十崎町)	
	村上寛仁	生名村役場	塩崎 満雄	三崎町役場	
	井村雄三郎	自営(関前村)	藤本一三	野村町役場	
	青木光利	(株)林魏建築設計事務所(松山市)	二宮美日	虹企画(広見町)	
	ヘロン久保田雅子	(株)パツフォ(松山市)	宮本清幸	津島町役場	
	渡邊 智	(財)愛媛県まちづくり総合センター	金原 徹	御荘町教育委員会	
	牧 秀宣	農業(重信町)	近藤 誠	東予市役所	
			事務局長		

### お知らせ

「舞・たうん」編集係の一員だった毛利智恵子さんが十月三十一日付でセンターを退職しました。



十一月一日からセンターの一員となりました白石まり子です。頑張りますので、よろしくお願ひ致します。



十二月もあとわずかとなりました。一年なんて早いものですね。平成四年は皆さんにとって忘れられない年になったでしょうか？  
来年もよろしくお願ひ致します。

\*\*\*\*\*

今回、論壇「まちづくり」は、都合により休載いたします。

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞・たうん」編集係

二人のM.S. (安田・白石)まで  
〒七九〇 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 〇八九九(三三)七七五〇  
FAX 〇八九九(三三)七七六〇

発行・平成四年十二月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議